

ペルー・アンデス南部村落再訪—持続と変容の5年間—

青 木 芳 夫*

Continuidad y cambio en el sur andino del Perú (1994-1999): un ensayo

Yoshio AOKI

要 旨

本稿では、再び家族と一緒に5ヵ月間生活することとなったペルー・アンデス南部村落のユカイ村がこの5年間にどのような持続と変容を経験したのかを分析する。第一の特徴である持続では、エネルギー・資源利用ならびに食生活を通じて、今日でも自足を旨とし、現金支出はできるだけ抑制しようとする姿を記述する。第二の特徴である変容では、社会経済的变化に伴う兼業化・離農を契機とした、自給農業における労働力調達や伝統的宗教儀礼における人間関係の変容を指摘する。

I はじめに

1999年4月から5ヵ月間、奈良大学在外研修制度により、再びペルー・クスコ市近郊農村のユカイ村で家族とともに生活することとなった。今回は、国立クスコ大学人類学教室で客員研究員として「ケチュア語の総合的研究」に従事した。前回の在外研修（1994年、ペルー中部大学大学院）からちょうど5年が経過した。本稿では、この5年間にユカイ村がどのように変化したのかを印象記風に記述するのが目的である。

さて、ユカイ村（次ページ、写真①参照）は筆者の目には農村にしか映らないが、1993年の国勢調査によれば人口2880名で独立の「地区 distrito¹⁾」を形成しており、付属のサンファン村（人口237名）を除けば、ペルーの統計上では「都市部 zona urbana²⁾」に分類される。ここには、妻アンヘリカの実家であるトゥモロコシ農家のP家がある。専業農家の両親は60歳代で、日本で暮らしている長女アンヘリカ以外の二男一女が同居している。5年前に家業を手伝いながら教育専門学校を卒業した長男（30歳代）は、現在では昼間はマイクロバスを運転し、夜間は観光ホテルの従業員として働いている。次女（30歳代）もまた、現在は同じホテルの従業員である。そして、次男（20歳代）が今もまだクスコ市の大学の農学部に通いながら、分収小作の形で家業を手伝っており、すでに結婚して子供が一人いる。長男と次女は正規の職員であり、十分独立できるのだが、両親と同居しており、P家は、拡大家族を意識的に選択してきた。ただし、普通の農家なので、手伝いはいない。すべて家族の労働力によって賄っている。

以下では、家族（妻アンヘリカと小学生2人、幼児1人）とともにこのP家に同居することとなった筆者が見聞したところを記述する。

写真① ユカイ村風景



*中央部右寄りに教会をはさんで2つの広場が並ぶ。民家は舗装道路ぞいに密集している。

II 変わらない自足の生活態度

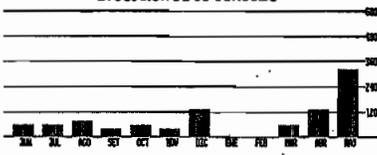
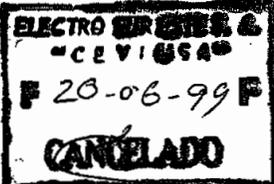
1 エネルギー・資源利用

ユカイ村のおもなエネルギー源には、現在、薪・電力・プロパンガス・灯油等がある。前回家族とともに滞在した折り、P家は、すでにラジオ、白黒テレビ、大型冷蔵庫は保有していたが、さらに電化される結果となった⁹⁾。具体的には、カラーテレビ、ビデオ、電気洗濯機、電気コンロ、タンク式電気温水器を筆者家族が購入したからである。今回の滞在では小型の電気ファンヒーターを買い足した。なお、調理のためには、前回の電気コンロに替えて、今回はもっとも経済的といわれるプロパンガス=コンロ（1本28ソル）を主として利用した。なお、今回の滞在にさいしては、筆者家族のために独立の台所（流し台とガス=コンロ）を用意してくれたため、ペルーではめずらしい二世帯住宅となった。

しかしながら、妻の両親や弟妹たちは、筆者家族が購入した電化製品をあまり利用しない。両親がもっとも使用する電化製品はラジオであり、ほとんど一日中付けっ放しになっている。朝飯前に一仕事を終えた父親はクスコ市のラジオ局からのスペイン語のニュースを聴き（最近ケチュア語のラジオ局ができたが、まだ本格的なニュース番組は製作していない。）、昼間は母親がワイノなどの音楽を楽しむためである。弟妹の世代となると、ラジオにテレビ（カラーテレビと白黒テレビ。ケチュア語やその他の先住民言語の番組はなく、すべてスペイン語による放送である。）が加わる。両家族の電力利用は対照的であり、その結果は電力使用量の差となって現れてくる（資料①参照）。筆者家族が滞在したのは4月から8月の5ヵ月間であり、

そのうち4月には20日間、7月には15日間旅行のために留守であった。たとえば、資料①によれば、5月分として200ソル強（その内訳は、「基本料」約2ソル、「エネルギー代」約160ソル、「街灯代」約12ソル、維持修繕代少々、消費税18%）を電気会社に支払ったことになっている。その大半は、サンフアン＝デ＝ビルカノタ山の雪解け水を利用しているユカイ村の簡易水道のあまりの冷たさに閉口して従来の電熱式温水シャワー（一般家庭用）をホテルにあるようなタンク式電気温水器に付け替えたこと（毎日4時間あまり使用）によるものであろうが、この額は、現金の使用については禁欲的とならざるをえないペルーの一般家計からすれば、少なからざる額であった。しかしながら、単なる金額の多寡だけが問題ではなく、それはむしろ生活態度の根幹にかかわってくる問題であった。

資料① 5月分の電気代

		R.U.C. 11864428 AMARIPACA SUR ESTE 400 - HANGOPATA 550 MES FACTURADO MAYO-1999															
RECIBO 06-0117297		TOTAL A PAGAR 204.45 ULTIMO DIA DE PAGO 25-JUN-1999 FECHA DE EMISION 03-JUN-1999															
PALOMINO. ADRIAN Espinar s/n NUMERO DE CLIENTE : ██████████		RUC ZONA 4 YUCAY															
DATOS TÉCNICOS DEL SUMINISTRO CODIGO 013-07-01-000820 TARIFA 8T5R POTENCIA CONTRATADA 6.00 KW MEDIDOR No.00 MONOFASICO FACTOR 1 LECTURA ACTUAL 032710 31/05/1999 LECTURA ANTERIOR 032396 01/05/1999 CONSUMO DEL MES : 314 KWH -C>P -CONF EL COSTO DEL KWH ES : S/. 0.5051 SU CONSUMO PROMEDIO DIARIO EN SOLES FUE : S/. 5.29 EVOLUCION DE SU CONSUMO 		DETALLE DE FACTURACION <table border="1"> <thead> <tr> <th>CONCEPTO</th> <th>IMPORTE S/.</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>CARGO FIJO</td> <td>1.96</td> </tr> <tr> <td>ENERGIA</td> <td>158.60</td> </tr> <tr> <td>ALUMBRADO PUBLICO</td> <td>12.15</td> </tr> <tr> <td>MANTENIMIENTO Y REPOSICION</td> <td>0.56</td> </tr> <tr> <td>SUBTOTAL</td> <td>173.27</td> </tr> <tr> <td>I.G.V.</td> <td>31.19</td> </tr> </tbody> </table>		CONCEPTO	IMPORTE S/.	CARGO FIJO	1.96	ENERGIA	158.60	ALUMBRADO PUBLICO	12.15	MANTENIMIENTO Y REPOSICION	0.56	SUBTOTAL	173.27	I.G.V.	31.19
CONCEPTO	IMPORTE S/.																
CARGO FIJO	1.96																
ENERGIA	158.60																
ALUMBRADO PUBLICO	12.15																
MANTENIMIENTO Y REPOSICION	0.56																
SUBTOTAL	173.27																
I.G.V.	31.19																
INFORMACION ADICIONAL LA NO CANCELACION DE LA PRESENTE FACTURA GENERA ORDEN DE CORTE. PAGUE A TIEMPO Y EVITE COÍLAS. ELECTROFONO 201070 Y 202005 LAS 24 HORAS																	
REDONDEO -0.01 TOTAL 204.45		SON : DOSCIENTOS CUATRO con 45/100 Pague solo en Centros Autorizados No al Mensajero															

*昨年12月の電気使用料が突出しているが、原因不明である。

両親らにとって、基本的なエネルギー源は薪であり竈である。灯油コンロも、末弟の嫁の助言と手助けもあり、今回はほとんど利用しなくなっていた。薪にする雑木の丸太は購入するが、農家だけに燃やせるものはいろいろある。主食のスープ類や飲料類を調理するにも適しているという。また、竈のある部屋は比較的暖かいのも事実であり、寒さに強くないクイ（テンジクネズミ）、とくに雌や若いクイを放し飼いにしてあったりする。沐浴用には、竈で温めた小さな甕一杯分の湯を利用する。あるいは、冬でも20度を越える日中の強い日差しによって温められた川辺や裏庭のお気に入りの水場で沐浴したり、洗濯したりする。

その他、この5年間で特筆すべきものに電話の敷設がある。ユカイ村では、1993年の国勢調査では電話のある民家はまだ1軒だけだったが、現在では電話のある世帯は40~50世帯、全世帯の5%程度と思われる。数年前のキャンペーン・セールの際に学校の教師などの世帯を中心に普及した結果である。P家では弟妹が主として利用している。両親のところには、主として早朝に、用事のある人が直接家まで尋ねてくる。ただし、資料②のとおり、ペルーの世帯からすれば、電話（民営化の結果、スペイン資本系の会社によって買収された。）は、基本料金が割高な料金体系（資料②では、基本料金が46ソル強を占めており、それ以外に地元局内の通話超過分とその他の通話代、留守番機能代などを支払う）になっている。

資料② 5月分の電話代

Telefónica del Perú S.A.A. <small>RUC 10001149 AYAJAJUQUA 1191 - LIMA</small>		Fecha de emisión : 28.05.99 Fecha de vencimiento : 19.06.99 Número de Abono : Telefonía [REDACTED]	
TELEFONÍA FIJA		Hoja 1 de 1 T53-[REDACTED]	
Recibo No. : T53-01894588 Abonado : [REDACTED] Domicilio : [REDACTED], YUCAY CERCADO - URUBAMBA Inscripción/Central : 00756798 CUSCO - AB ROSO Domicilio de Pago/Cuenta Cliente : [REDACTED], YUCAY CERCADO - URUBAMBA	2998 R.U.C.:		
CONCEPTOS		Importe(\$/.)	
1. Renta Básica			46.18
2. Mantenimiento			2.00
3. Renta Memovox			1.26
4. Consumos al 21.05.99			42.44
	Llamadas	Minutos	Libres* Importe(\$/.)
	Llamadas locales horario diurno *	30	104 58 3.80
	Llamadas locales horario nocturno *	1	2 2 0.00
	Llamadas nacionales	5	35 18.17
	Llamadas internacionales	1	7 20.67
5. Mora Fact.: T64-01892630			0.08
6. Impuesto General a las Ventas I.G.V. 18%			16.55
TOTAL A PAGAR POR SERVICIO TELEFONICO		108.51	
TOTAL A PAGAR		108.51	
* Incluye el cargo por establecimiento de cada llamada (equivalente a 1 minuto).			

資源利用についてみれば、ゴミの問題を指摘できる。筆者らがユカイ村に到着してすぐに手渡されたのが、前回の滞在の折に購入したゴミ箱であった。両親たちは、ほとんどゴミを出さない。燃えるものはすべて竈の燃料にしたり、庭や畑で燃やしたりする。また、食物クズは、

草食性のクイや雑食性の犬・豚の餌となる。それ以外のものは、敷地内か川辺の畑に埋めることになるが、ほとんど埋める必要がないくらいである。前回の滞在では、紙オムツやミルク缶の処理に困ったことを覚えているが、今回は、数年前に日本から供与された中古の清掃車がゴミの回収に毎週定期的に巡回するようになったので、ずいぶん楽になった。ただし、回収されたゴミがどのように処理されているのかは、知らない。また、他の人のゴミを見て気が付くのは、家畜の糞尿まじりの土がゴミとして出されていることである。かつてなら、自分の敷地内で処理したものである。人々の自足意識が変化してきているのか、それとも居住環境の変化（間借り等の増加）によるものなのか、もう少し観察が必要であろう。なお、ユカイ村全体の観光産業化に伴ない、ホテルを中心とする排水や汚水を含め、ゴミ問題が深刻になりつつある。

2 食生活

前回の滞りの折り、1週間の献立を記録したことがある。資料③がそれであり、7月上旬の1週間を表わしている。7月は乾季に属し、雨季の、たとえば12月や1月の食生活とはだいぶ異なるであろうが、全般的な傾向は知ることができる。

資料③

	朝食	昼食	夕食
日	ハーブ茶、オートミール入り牛乳、蜂蜜入りパン	ヒョウタンのスープ（肉・ジャガイモ・野菜入り）、野菜炒め、茹でトウモロコシ、梨	カボチャのピューレとご飯、アセルガ菜とホウレンソウのトルティーリャ
月	ハーブ茶、オートミール入りチョコ牛乳、蜂蜜パン	細スパゲッティのスープ（肉・野菜入り）、内臓とフライドポテトの辛味料理、茹でトウモロコシ、ゼリー	クイの丸焼き、ご飯、野菜サラダ
火	パパイヤ・ジュース、オートミール入り牛乳、チーズ・ジャム入りパン	半煎り粉のポタージュ、小魚の辛味料理（ジャガイモ・パセリ入り）、バナナ	トマト・ソースかけスパゲッティ（目玉焼き付き）、茹でトウモロコシ
水	パパイヤ・ジュース、キウイチャ・ソラマメ粉入りチョコ牛乳、チーズ・ジャム入りパン	凍結乾燥ジャガイモのスープ（オユコ芋・肉入り）、魚フライ、オカ芋、茹でトウモロコシ、梨	カボチャのピューレ、ご飯、青ネギのトルティーリャ
木	ソラマメ粉入りスクランブルエッグ、コーヒー、パン、煎りトウモロコシ	凍結乾燥ジャガイモのスープ（野菜・肉入り）、オカ芋、蒸し凍結乾燥ジャガイモ、レタスのサラダ（タマネギ・トマト・アボガド入り）	クイのペビアン、ご飯、茹でトウモロコシ
金	ソラマメ粉入りスクランブルエッグ、紅茶、煎りトウモロコシ	穀粒のスープ（肉・野菜入り）、鶏肉の焼肉、茹でトウモロコシ、オレンジ	具入りトウガラシの揚げもの、焼きジャガイモ、煮豆
土	ニンジン・キウイチャ・ソラマメ粉入りチョコ牛乳、バター・ジャム付きパン	鶏肉入りコメのスープ、フライドポテトのレタス・ツナ添え、オカ芋、蒸し凍結乾燥ジャガイモ、バナナ	卵入り細スパゲッティのスープ、マサモラ、コーヒー

以上の献立のための主要な食材は、下記のとおり調達された。なお、ユカイ村における調達方法には、現金購入、物々交換、自給という3つの選択がある。

《自給》

ヒョウタン、肉類、クイ、フリホール豆、ソラマメ、ハーブ類、卵、キウイチャ、トウモロコシ、梨、鶏肉、大型トウガラシ（ロコト）、小麦、青野菜、カボチャ

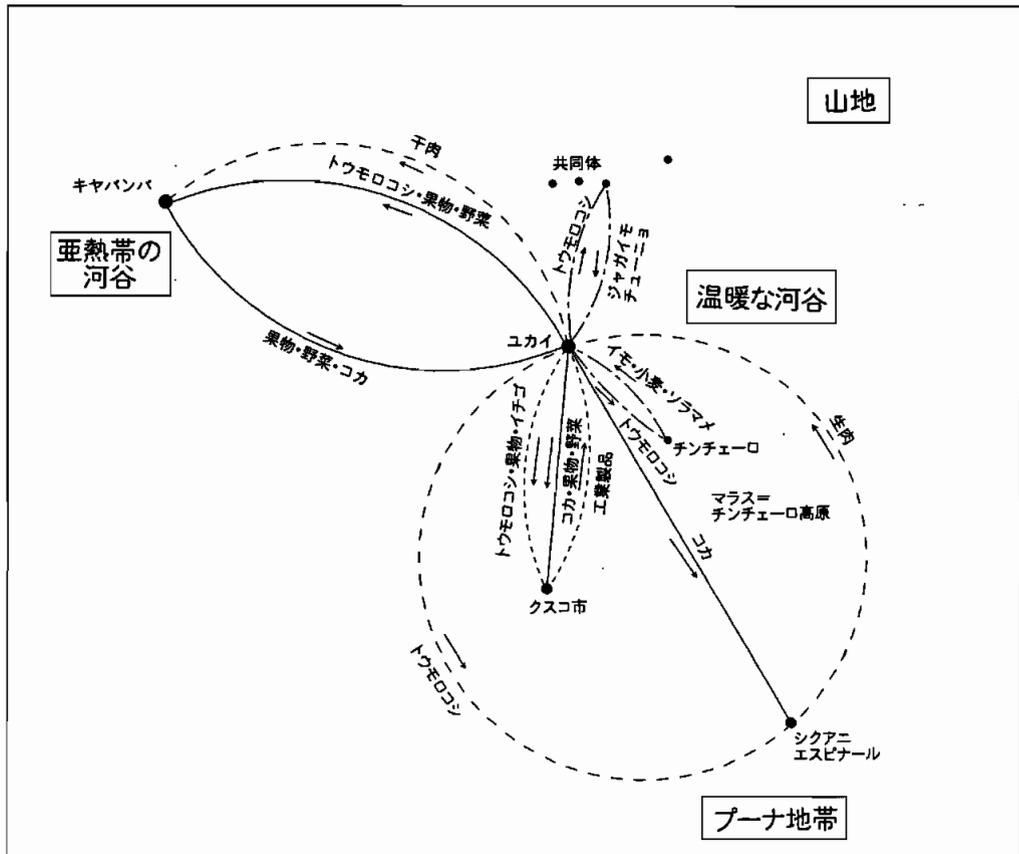
《物々交換》

穀粒（チャケパ）、凍結乾燥イモ（チューニョ、モラヤ）、オカ芋、ジャガイモ

《現金購入》

米、ツナ缶、砂糖、コーヒー、肉類、料理用チョコレート、細スパゲッティ、ゼリー粉、オートミール、牛乳、マサモラ粉、ジャム、蜂蜜、オレンジ、アボガド、パン、パパイヤ、魚、バナナ、鶏肉、チーズ、大型トウガラシ、紅茶、スパゲッティ、青野菜

資料④ ユカイ村を起点とする物流モデル



出典：A. Molinié Fioravanti, *La Vallée Sacrée des Andes*, Paris, 1982, p. 80

なお、近年では、ユカイ村では土壌の悪化のためか、イチゴが収穫できなくなっている。

このように、海拔約2800メートルの、比較的温暖なケスワ（ケチュア）地帯⁴⁾に属するユカイ村では、トウモロコシを主作物として、その他、多種多様な果物（梨以外にも、レモン、イチジク、カプーリ、ピワ、アボガド、イチゴ、モモ等）や野菜が栽培されている。そのため、物々交換の対象となるのは、もう少し寒冷な高地、例えば徒歩で1時間半ほどの距離にある同じ地区内のサンファン村や、日曜市で有名な隣の郡のチンチエーロ村で栽培される芋類ということになる。その他、現金で購入しなければならないものには、加工食品（スパゲッティ類）や亜熱帯性の作物（米）や果物（バナナ、パパイヤ、オレンジ類）、そして自給だけでは不足する部分を中心となる（前ページ、資料④参照）。重要度の点では、自給、物々交換、そしてだいぶ下がって現金購入の順となる。

なお、ユカイ村の特殊性として村内に修道院が経営する中学校付設の牧場があり、牛乳・チーズ・ハム・ジャム・蜂蜜等はそこで購入できることがある。ただし、現在では中小の民間畜産農家もかなり存在する。

こうして、エネルギー・資源利用ならびに食生活の両面からは、ユカイ村の人々は、今日でも、自足を旨とし、現金の支出はできるだけ抑制しようとしている、と結論することができる。

Ⅲ カトリック系南部村落における変わりゆく人間関係

P家の場合、ユカイ村の中でもわりあい自足度の高い世帯であり、それを支えているのが比較的大きな耕地面積である。

P家の世帯主はかつてカチマヨの肥料工場で熟練工として働いていた公務員であったが、ペラスコ左派軍事政権（1968-75年）の農地改革をきっかけに彼自身の宗教親（パドリーノ）でもあった農園主から数人の仲間と協同で土地を購入し、専業農家となった。いわゆる帰農農家の一例である。約4ヘクタールにのぼるその所有地の細目は下記のとおりであり、ユカイ村の農家（平均耕作面積0.5ヘクタール⁵⁾）としては大きいほうであるが、ペルー全体では小農に分類される。以下では、その5年前の耕作規模を指摘する。なお、現在でも耕作規模自体は同じだが、末弟に分収小作させているため、作物の種類等には若干変化が見られた。

《畑（「上地区」）》

10トポ（元農園主から購入、3トポで約1ヘクタール）。一部では、家畜用飼料として大麦を栽培し、そのあと販売用としてキャベツあるいは自家消費用としてジャガイモを栽培する。主作物は販売用のトウモロコシであり、8月から5月にかけて栽培する。その後、しばらく休閑させたり（その間、牛を放牧する）、7月から12月にかけてカボチャを栽培したりした。なお、1トポは、分収小作に出しており、残りの2トポは休閑中であった。つまり、7トポ分を直接耕作していた。

この畑は、協同購入当初はじっさいに協同で耕作し利用していたが、やがて分割利用に移行した。ただし、興味深いことに、耕地を各人で一円化して分割したのではなく、さまざまな条件ごとにみんなで均等に分割した。そして、世代交替の時期を迎えて、現在、正式に分割私有

地化の手続き中である。

《畑（「下地区」）のウルバンバ川端》

1トボ（長いあいだ賃借していた村有地を購入）。川端のため、灌漑がしやすく、販売用のキウイチャ、販売用のトムロコシ、販売および飼料用の大麦を輪作する。

したがって、耕地としては、合計11トボ、約4ヘクタールの規模となる。これに加えて、ユカイ村の通例に従い、以下のような家庭菜園ならびに牧畜があり、よく手入れが加えられている。

《家庭菜園（住居敷地内）》

トムロコシと豆類（フリホール豆・ソラマメ・エンドウマメ）以外に、以下のようなものが栽培されていた。すべて、少量ずつである。

野菜では、レタス、トマト、アセルガ菜、ハウレンソウ、タマネギ、ヒョウタンを栽培する。果物では、梨（販売用）、オウトウ、リンゴ、カブーリ、ピワ、アボガド、レモン類、イチゴ、イチジクを栽培する。それ以外に、ハーブ類として、アピオ（セロリ）、トロンヒル、マンサニーヤ（カミツレ）、ヒノホ、オレガノ、ワカタイ、マルパ＝ブランカ、ワルワ、クラントロ、イエルバ＝ブエナ等を栽培する。

《家庭菜園（「上地区」の山際の階段畑）》

ここでは、販売用のニンジン栽培したあと、ジャガイモを輪作する。その他、果物類（梨、オウトウ、リンゴ、カブーリ、ピワ、アボガド）を栽培し、梨とカブーリは販売できるほど収穫する。また、以下のようなハーブ類も育つ。ムニャ、コラ＝デ＝カパーヨ、アピオ、トロンヒル、マンサニーヤ、ヒノホ、イエルバ＝デ＝カンスル、ケトケト。

《家庭内牧畜》

住宅敷地内では、自家消費用としてクイとニワトリを（そして99年現在ではアヒルも）飼育している。その他、畑の敷地内で牛（耕作用）を3頭放牧している。その他、やはり自家消費用に羊を15頭、サンフアン村の知り合いに預けてあった。8頭が元手で、5年前の当時15頭に増えた。なお、99年現在では、羊はマラス村の知り合いに、コンパドレ関係を結んで、預けるようになっている。

P家は、農地改革をきっかけに専門化した層を代表している。ユカイ村の農家がすべて専門農家ではない⁶⁾。そのうえ、左派軍事政権の成立を契機とする社会経済的流動化の波に乗って離農していった事例には事欠がない。その結果、さまざまな変化が村内の人間関係にも生じてきている。以下では、労働力調達と祭礼における事例を紹介する。

1 労働力調達に見る変容

まず、5年前のノートから転載する。

P家は、ユカイ農家では比較的大規模な農家である。家族構成は、世帯主・その妻・次女・長男・次男の単婚小家族である。なお、長女は婚姻により日本で生活している。

主たる農業労働力は世帯主だけが専業で、隣町のウルバンパの教育専門学校生である長男がほぼ日常的に、そしてマイクロバスで1時間半の県都クスコの大学生である次男が週末や休暇のときに、それぞれ世帯主を手伝っている。次女は、ウルバンパの中学校の教員をしている。経営形態は、家族労働力による自営であるが、世帯主の高齢化に伴い、また長男が辺鄙な学校に赴任するかもしれないので、自営できない部分は徐々に分収小作に出すようになっている。また、昨年トラクターを購入し、省力化に努めている。個人農家としては、ユカイ農村では唯一の例である。

したがって、日常的な労働力は家族で賄っているが、しかし農繁期などは臨時に人を雇わざるをえなくなる。ここではトウモロコシの収穫期を例にとる。1994年は、播種直後（11、12月）の強風と収穫前後（4、5月）の長雨に祟られ、作柄は平年の半分ほどであった。それでも、数度にわたり5、6名を臨時に雇わなければならなかった。豊作の時には20名にもものぼる。ユカイ農村でも日傭労働者層は存在するが、臨時に人を雇うことはそれほど簡単ではない。数日前から約束しておいたり、前金を払っておくことになる。ユカイ農村の相場は一日3ソルないし3.50ソルである。ドルに換算すれば2ドルにも満たないし、クスコへの往復バス代（4ソル）にもならないが、極力現金に頼らないユカイ農民の生活感覚からすれば、2000円程度にのぼるかもしれない。ちなみに、1ソルでパンが10個買える。瀟洒なレストランの昼定食コースが3.50ソルほどである。

5、6名のうち、2名は現金が目的ではなく、耕耘用に牛（2頭立て）を借りるのが目的であった。牛1日の賃借料は4日分の労働に相当するという。

人を雇うためには、実はそれだけが必要なのではない。食事付が普通である。朝、三々五々集まってくる人に朝食（スープとパン）を出す。昼にはチチャというトウモロコシ＝ビールと弁当（茹でトウモロコシ、スープ、等）を畑まで届ける。そして夜には畑か家で夜食を提供する。この日は、近所に住むコマドレが自発的に手伝いに来てくれた。世帯主の妻がコマドレの娘の洗礼親を引き受けたためである。

ただし、食事は何日もかけて用意しなければならない。チチャづくりのためには1週間前から支度を要する。

日曜日の当日に、仕事が終わって、自宅まで戻って休息しているうちに、音楽が始まった。長男がアコーディオンを、そして友人の日傭労働者がアルパ、そして友人の友人がマリンパを演奏する。時ならぬ生演奏だが、人々にはそれを期待していた節がある。アルパもアコーディオンもユカイ村では彼らだけである。近辺の町村でも最近では珍しいので、祭礼や結婚式、パーティでは演奏に呼ばれることが少なくない。結局、2時間近く演奏と踊りが続いたあと、人々は満足して帰っていった。料理の量も多く、酒もおいしい。そして、踊ったりできるかもしれないというので、P家の場合、人集めにはあまり苦勞していない。純粹に経済学的な計算のみによって、働きに出掛けたり、人を雇ったりするのではないようである。もちろん費用計算も重要な一要素かもしれない。

ただし、それ以外に、若い働き手がいるということも非常に有利である。というのは、アンデス農村では「アイニ」という伝統的な労働力調達の方法が残っているからである。これは、一種の労働力の賃借の方法である。アイニに応じた場合、将来手伝いが必要な場合、手伝ってもらえることを期待してよい。

そのほか、「ミンカ」という労働力調達の方法がある。これは現金で支払うのではなく、現物で支払う方法である。例えば、ジャガ芋の収穫を手伝ったとすれば、その収穫のうちから持って帰れるだけ持って帰ってよい。

アイニもミンカも現金支払いに頼らない労働力調達の方法であるが、強制的なものではけっしてないので、結局日常的な人間関係が重要ということになる。

P家の世帯主の場合、高齢でもあるので、他人の収穫の手伝いに行くことはほとんどないが、ただし元農園主が名付け親、つまりパドリノであるので、要請が来ることがある。ペルーの場合、1968年に誕生した左派軍事政権の時代に比較的大規模な農地改革が行なわれたが、農園主つまりアセンダードは家を建てたり知合いの農民に土地を売ったりして極力接収を免れるようにした。P家の世帯主もまた元農園主との間に同様の関係があった。また、トラクター用のトレーラーを平日は賃借する関係が続いている。そのため自分の畑の仕事を差し置いても、現実には手伝いに行かなければならない、ということになる。元農園主は農民の気持ちや好みが理解できないので、十分接待できず、そのため他村から人を集めてこなればならず、彼らを監視するためにも、信頼できるP家の世帯主に頼み込むことになるのである。

以上は、5年前の労働力調達の状況であった。このときすでに、伝統的な互恵的労働制度であるアイニやミンカにしてもかなり形骸化してしまっていた。飲食の供応という側面だけがそのまま残っていた。耕地面積や役牛、さらにトラクターなどの農機具の保有状況にはかなりの差が生じていた。ただし、そのような保有の多寡がそのまま生活の質の差につながるわけではない。「落穂拾い」の慣行（限度を超えた「作物泥棒」も横行しているが）や、単なる市場価値に基づかない売買の存続により、一種の「貧困の共有」のような状況が根強く残っているのも事実だからである。ともかく、役牛を借りるために労働力を提供しなければならないという農家が出現していた。（ただし、これもまた今では一種のアイニとして意識されている。）それがもう一歩進んだなら、農業そのものを止めてしまうことになる。また、国内市場向け農業はペルーの場合、それほど有利な選択でもなく、ユカイ村でも30歳代・40歳代を中心に兼業化が急速に進行中である。実際、このような状況は、いっそう深刻化しつつある。1999年の滞在中には以下のような事例があった。

1999年のユカイ村における労働力の調達を見れば、アイニやミンカはほとんど見られなくなっている。アイニが成立するのは、単なる村民同士の間柄ではなく、もっと友人同士の間くらいのものである。伝統的な協同労働で唯一残っているのは、「ファエナ」であろう。ユカイ村の場合、水路の清掃が、年間行事の一つとしてこの形態によって実施されている。

したがって、農繁期における労働力調達のためには臨時日雇労働力に頼ることになる。彼らの賃金は、男子が7ソル（2ドル強）、女子が6ソルであった。ちなみに、クスコへの往復バス代が5ソルと比較的低く抑えられている。パンは10個で1ソルのままである⁷⁾。ミンカのような現物支給よりも、現金支払いが好まれる。もちろん、現在でも飲食付きである。それでも、人を集めることは一苦勞であったし、臨時日雇労働者といってもさまざまな職業に就いている人々が中心であり、日程の調整が必要であった。具体的には長男のバンド仲間（本職は観光ホテルの従業員で、自分でも畑を耕作している。）が手伝ってくれたり、宗教親関係でその高齢の配偶者が数回手伝ってくれた。（キヌアの脱穀、山際の階段畑におけるジャガイモの畝づくりや収穫、果穂収穫後のトウモロコシの茎の刈り入れ、トウモロコシの脱穀など。）

そのため、最近では、特に多数の労働力を必要とするときには、修学旅行等の費用を捻出し

たい学校の生徒を臨時に雇うことが流行するようになってきた。たとえば、新しい傾向として、5月のトゥモロコシの収穫のときには、週末（や休暇）を利用してARARIWAという集団（生産共同体的な、一種のNGO）が運営する農業技術専門学校の生徒が収穫を請け負った。彼らは、雨にもかかわらず、勝手に畑にやってきて、勝手に収穫しつづけ、P家の人々を驚かせた。ただし、従来のアイニ的な互恵的な雇用関係ではないので、茹でトゥモロコシとチチャ（これらも雇用主側の好意による）を除けば、飲食の供給は必要なく、P家の女性たちにとっては非常に楽だったようである。

ちなみに、彼らによるトゥモロコシ畑の請負い料金（1トボ当たり）は、以下のとおりであった⁹⁾。

収穫	60ソル
土寄せ	80ソル
除草	45ソル

このような請負い労働という新しい形態の出現は、もちろん従来の労働慣行がこれに全面的に代替されるわけではないし、近い将来にこれが主流になるとも予想しづらいにせよ、注目に値する現象である。

2 岐路に立つ十字架の祭り

筆者家族は、再び5月の十字架の祭り⁹⁾の季節にユカイ村にいた。5月3日のクルス＝ベラクイ（カトリック暦では「真の十字架発見記念日」）に続いて、5月下旬にはペンテコステス（カトリック暦でいう聖霊降臨祭）が今年も盛大に挙行された。しかし、5年前と比較すると、そこにはかなりの変容が見られた。象徴的に指摘すればテープと闘牛が新たに登場するようになった。

聖霊降臨祭は、ユカイ村では7対の十字架の祭りの意味をもっており、5日間続く。前夜祭・主日・中間日・別れ（川渡り）・後夜祭という構成には変化はなかった。

「闘牛」は、最後の後夜祭の時に実行され、十字架のうち「上地区」では「パシオン」十字架の主催によって、旧小学校校庭に臨時のスタンドを仮設して、愛好家の闘牛士によりコリダが披露された。もちろん、牛は殺さない。こちらのほうは、ラジオ放送でも宣伝されていたため、かなりの観客が動員された。一方、「下地区」では、「カルバリオ」十字架の主催によって、村の中央広場の一方で文字通り闘牛が行なわれた。村の畑では、牛の喧嘩は日常茶飯事だが、8頭の牛が参加し、どの牛が優勝するかが賭けられたりして、盛り上がった。（「ミシヨネーロ」十字架がアランチャ＝デ＝ガヨという余興を主催した年もあったが、動物いじめ的要素があり、去年・今年と行なわれなかった。かわりに、バンドの演奏があった。）この闘牛が開催されるようになったことに象徴されるように、十字架の祭りは華美化する傾向にある。前夜祭における花火類（各十字架の入場に先立つ「トロ」という花火、ミサ後の広場での「カスティージョ」等と呼ばれる仕掛け花火）もまた、増加傾向にあり、そのためミサが予定時間を遅れること1時間以上に及んだ。

もともとユカイ村における聖霊降臨祭では「別れの日」の川渡りのときに、多数の観客を呼

んできた。したがって、この華美化は、クスコ市の事例を分析した加藤隆浩¹⁰⁾の指摘する、十字架の祭りのスペクタクル化という側面をもっている。また、7組のカルグヨクを単位として举行される祭り全体の「公共空間」の拡大という解釈もできよう。

「テープ」は、何を意味するのであろうか。次の2枚の写真(写真②・③)を比べれば明白のように、特にカルバリオの十字架の変貌が著しい。一つの解釈としては、マンタの着用にしてもテープの使用にしても、隣町のウルバンパの十字架「トレチャヨク」を模倣しているにすぎないと見ることができるが、テープは、本来「信徒団体」を象徴するものとして使用されてきたことからすれば、「公共空間」の拡大とは裏腹に十字架の祭りにおけるカルグヨクの閉鎖集団化を示唆するものではないだろうか。実際、7対の十字架のうち、「バシオン」、「カルバリオ」(ついで「ミシヨネーロ」)など、比較的大きな十字架にこの現象が見られた。たしかに、カルバリオのカルグヨクは、近年、特定の親族(どちらかといえば、ユカイ村のエリート層でもスペイン語しか話そうとしない人々)で占められてきた。

写真② 1994年のクルス=ベラクイ



※銀製の飾りをつけているのが「カルバリオ」十字架、それに続くのが「バシオン」十字架。

写真③ 1999年のペンテコステス



※「カルバリオ」十字架。中央の背広姿の人物がカルグヨク。

さて、ここでは、この十字架の祭りをその費用の側面から見てみたい。

もともと次年度のカルグヨクは等量もしくは等量以上のお返しをするという伝統的な意識のある土地柄だから、祭りは華美化する傾向があるところに、近年の華美化に伴い、その費用総額もかなりの額に昇るようになった。特に聖霊降臨祭は5日間に及ぶから、その費用もたいへんである。弟妹の推定では、2000年には1対の十字架当たり3700ドルに昇る。その内訳は資料⑤のとおりである¹¹⁾。

資料⑤

フルカ用のパン……		450ソル
カルゴ用のパン……		268ソル
小麦14アローバ	98ソル	
小麦粉1キントル	70ソル	
添加物	100ソル	
食料その他……		1万1551ソル
ビール60箱	2520ソル	
バンド [楽団]	3000ソル	
牛1頭	800ソル	
羊4頭	160ソル	
子豚5頭	300ソル	
鶏肉10キロ	100ソル	
仕掛け花火1基	3000ソル	
米100キロ	160ソル	
砂糖50キロ	80ソル	
ジャガイモ5袋	125ソル	
リキュール12本	24ソル	
ワイン20本	200ソル	
スパゲッティ40キロ	80ソル	
添加物	100ソル	
ピスコ酒7本	70ソル	
添加物(レモン、卵、果物)	50ソル	
チチャ酒4アローバ	72ソル	
薪	60ソル	
料理長報酬	50ソル	
合計		1万2269ソル (約3696ドル)

全部で7対の十字架があるから、総額で約2万6000ドルになる。実際には、カルグヨクの引き受け手のいない十字架もある。

ともかく、この多額の費用をいかに工面するのだろうか。村政府からの補助はほとんど期待できない。自費を中心に、「アイニ」と「フルカ」によって、調達される。

前者の「アイニ」は本来互酬労働を意味しており、祭りでアイニの提供を受けたなら、将来相手がカルグヨクになったときに等量のお返しをする義務がある。

後者の「フルカ」は本来無償の物資提供のはずである。クスコ県のピルカ村のクルス=ベラクイについて記述したヤバルは、フルカヨクつまり「フルカをする人」について「無報酬で贈与し協力する者」と定義し、クルス=ベラクイでは一家族では背負いきれないくらい費用がかさむから、フルカヨクは不可欠である、と説明している¹²⁾。しかしながらユカイ村では、近年における華美化に伴い、飲食物以外の「フルカ」、例えば花火類や多額の提供（牛1頭とかビール）は負債として、あるいは少なくとも「アイニ」のように意識されるようになってきている。

これに対して、前述のとおり、臨時日雇労働者の賃金が7ソル（飲食付き）である。また、学校教員の月給が、控除前で約520ソル（160ドル弱）である。年収にして約1900ドルになる。ちなみに、ホテル従業員の弟妹の控除後の月給が315ソルであった。つまり、3700ドルという金額は、学校教員の年収の2倍近くにのぼる。以上のような純粹の経済学的な費用計算からすれば、ユカイ村において十字架の祭りのカルグヨクになることは、割の合わない奉仕となる。もちろん、パンダの費用を除けば、なんとかなるものだという経験者の助言もある。（この助言どおりだとすれば、それを可能としているメカニズムを分析する必要がある。）また、「フルカ」で集めた物資を上手に運用すれば、儲けすら生まれる、という部外者の意見もある。しかしながら、ここでは以下のように結んでおきたい。

費用の過大さや、社会経済的流動化と離農・兼業化に伴い、農村共同体的な性格や規制が薄れ、人々の意識はますます変化してくるであろう。じっさい、次年度のカルグヨクを依頼するのは当年度のカルグヨクの役目であるが、引き受け手を見つけるのは容易なことではなくなっている。そういう意味においても、ユカイ村における十字架の祭りは岐路に立たされている。

後記

本稿は、1999年度奈良大学在外研修制度による成果の一端である。奈良大学やクスコ大学の関係者、ならびにP家の人々に対し、この紙面を借りて謝意を表したい。

注

- 1) ペルーの基本的な行政区分は、県 departamento、郡 municipio、そして地区の3つである。その他、広域行政のための管区 regiónがあり、たとえばクスコ県はインカ管区に帰属する。
- 2) ペルーの国勢調査では、100軒以上が隣接していれば、「都市部」に分類される。ユカイ地区の場合、

舗装道路に沿って細長く住居が密集しているため、その大半が「都市部」に分類されることとなり、ウルバンバ郡の中でも特異な地区である。

- 3) 1993年の国勢調査によれば、ユカイ地区で保有されていた電気製品は以下の通りであった。ラジオ(487世帯)、白黒テレビ(286世帯)、冷蔵庫(101世帯)、音響機器(93世帯)、カラーテレビ(51世帯)、ビデオ(14世帯)、洗濯機(7世帯)、掃除機(2世帯)。INEI, *Censos nacionales 1993: IX de población IV de vivienda: Resultados definitivos. A nivel provincial y distrital. Provincias: Anta, Calca, La Convención, Urubamba*, Tomo II, 1994, p. 759.

ただし、先進諸国と比較してそんなにタイムラグがあるわけではない。ユカイ村にはインターネット＝カフェもあるし、隣町にはテレビゲーム屋さん(1時間当たり1ソル)もある。クスコ市内では、ケーブル＝テレビを引いて世界各地の番組を楽しんでいる民家(4軒集まれば引けるという)も多い。

- 4) ペルーの地理学者ブルガル＝ビダルによる地域分類の一つ。ちなみに、サンフアン村やチンチェロ村は、冷涼な高地であるスニに属する。
- 5) Rosario Valdeavellano, "Que germinen todas sus semillas: La persistencia en una apuesta educativa para el desarrollo rural", *Allpanchis*, No. 42, 1994, pp. 217-36.
- 6) 1993年の国勢調査によれば、ユカイ地区では15才以上の有業人口835名のうち、農林業は292名を占めており、自動車関連業84名、教育82名がそれに続いた。なお292名の内訳は、自営192名、無報酬家族労働力62名、労働者25名、職員12名、雇用主1名であった。
- 7) その他、1ソル(約40円)で購入できるものには以下のようなものがあった。卵4個、レタス3把、オレンジ10個、リンゴ4ないし5個、キャンディ20個、消しゴム付き鉛筆2本、ビー玉20個、ミネラル＝ウォーター500ミリリットル、隣町までのバスの往復代。また、調整牛乳1リットルは1ソル60であった。
- 8) ちなみに、トラクターの賃貸料(運転つき)は、1時間当たり35ソルが基本であった。
- 9) 拙稿「ペルー・アンデス南部村落における十字架をめぐる2つの祭り」『奈良大学紀要』第25号(1997年)では、以下のような誤謬があった。謝して訂正しておく。20ページの下から2行目の「教会」を「カルグヨクの家」、同じく「カルグヨク」を「カベシーヤ」に、それぞれ訂正する。フォーク・カトリシズム研究からすると、重大な誤認であった。なお、カベシーヤとは「先導役」のことで、十字架を山の礼拝堂から正月に降ろして来たり、ペンテコステスの終わりに再び山まで返しに行く先導をするのがその役目であった。現在では、ペンテコステスのときにはコンフントを調達して歌と踊りでその1本の十字架のベラーダをする。
- 10) 加藤隆浩「ペルー・クスコ市におけるクルス・ベラクイの変容」『国立民族学博物館研究報告』第19巻3号(1994年)、参照。
- 11) 1999年度の十字架「ミシヨネーロ」の費用は、カルグヨクだったファウスティノ・チョケ氏の計算によれば、次頁の表の通りであった。ただし、彼らは、この機会を利用して教会で結婚式を挙げた。

フルカ用のパン……		450ソル
小麦5袋	350ソル	
添加物(アニス等)	100ソル	
カルゴ用のパン……		338ソル
小麦14アローバ	168ソル	
小麦粉1キントル	70ソル	
添加物	100ソル	
食料その他……		1万5116ソル
ビール60箱	2520ソル	
バンド [楽団]	4500ソル	(中部アンデスのワンカーヨ市)
牛1頭	800ソル	
羊4頭	160ソル	
子豚5頭	300ソル	
鶏肉10キロ	100ソル	
仕掛け花火1基	4500ソル	
米100キロ	160ソル	
砂糖50キロ	80ソル	
ジャガイモ5袋	200ソル	
リキュール12本	24ソル	
ワイン20本	200ソル	
クイ60匹	600ソル	
油	60ソル	
スパゲッティ40キロ	80ソル	
添加物	100ソル	
ピスコ酒7本	70ソル	
添加物(レモン、卵、果物)	50ソル	
チチャ酒4アローバ	72ソル	
薪	60ソル	
土・日曜のコンフント演奏	400ソル	
合計		1万5904ソル

12) Betty Yabar, *P'irca: los apus, la biblia y los gentiles*, Lima, 1990, pp. 114-116.

Continuidad y cambio en el sur andino del Perú (1994-1999): un ensayo

Yoshio AOKI

RESUMEN

En este artículo, el autor examina las continuidades y los cambios que han sufrido los yucabinos en el sur andino del Perú en estos años. Por una parte, ellos continúan minimizar las salidas de efectivo para la comida y también para el consumo de energía. Por otra parte, las relaciones humanas en Yucay, por ejemplo en el caso del suministro laboral o en el ritual religioso, están cambiando, porque por los cambios socioeconómicos muchos agricultores ya han abandonado y ejercen agricultura como trabajo accesorio.

